

里地通信 11月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

連載：幹事紹介 私のまちづくりのきっかけ

萩原 喜之（はぎわら よしゆき）
中部リサイクル運動市民の会代表

私がまちづくりというものに関わるきっかけは、齊藤さん（愛知県美浜町町長・里地ネットワーク幹事）との出会いがあったからなのだと思っている。

中部リサイクル運動市民の会は、かなり以前から、有機農産物の流通を手がけており、その美浜町の生産者である杉浦さんから、ごみ問題のことで我が町の町長に会って欲しいという依頼がきた。町長と会い、ごみ問題について話をしている中で、町の将来像に話が及んでいった。美浜町は私の住む名古屋から車で50分弱で行けるところにありながら、諸条件で開発の波に洗われずにおかれた地域でもある。この残された自然を生かした町づくりをしていくのだという話を聞いている内に、私がぼんやりと思っていた夢の部分と重なってくる。というのは、一市民団体が町を触るなんてことは、思いもしなかったからだ。ひょっとしたらできるかも知れない。というより、考えている前に、口から「何かお手伝いできることはないですか。一緒にやらせてください」とついていた。

このことがきっかけとなり、美浜町に通うことが多くなる。その中で少しはまちづくりについて学べたのではないかと知っている。最初はあれもしたい、これもできると考えていたが、あることをきっかけに原点に戻ることになる。「市民運動の生産物は人である」という所に。今は、じっくりと10年単位で行動しようと思っている。しかし、一方で、18年前、地球環境問題をテーマにこの道に入った私としては、少々のおせりもある。私の知り得た知識や情報を元にと、地

球環境問題を回避するために残された時間があまりにも迫りすぎているからだ。

おりもあり、このところ中部地域はさわがしい。美浜町のある知多半島では中部国際新空港、さらに第二東名、2005年には環境をテーマにした国際博覧会がある。開発時代の総決算期を、今、迎えようとしている。環境問題で仕事をし、この時、この場所に住んでいるというのは、偶然ではないだろう。この町に住むひとりの市民として、自分たちの町の将来には少しばかりの責任を負っていきたくて考えている。



昭和28年静岡県小笠郡大須賀町生まれ。昭和55年『中部リサイクル運動市民の会』を設立、代表となる。平成4年『(株)リサイクル情報センター』設立、取締役就任。『名古屋市ごみ減量化・再資源化推進協議会』総括部会委員、『名古屋市環境教育推進協議会』委員、名古屋市東区地域環境審議会委員、『津島市循環システム促進協議会』会長、愛知県環境審議会総合政策部会委員、『愛知県21世紀計画』有識者研究会構成員、日本NPOセンター理事、経済企画庁「市民活動団体リーダーのための人材育成プログラム開発に関する調査」委員、市民フォーラム21・NPOセンター常務理事、愛知県民間非営利団体に関する有識者研究会委員、瀬戸市環境基本計画審議会委員などを歴任。著作には、『講座＜地球環境＞』全5巻（中央法規出版）の第5巻中「食べる市民運動」、『自治体・地域の環境戦略』全7巻（ぎょうせい）の第7巻「非営利団体の環境活動」がある。

里地セミナー報告

日本の民族文化を伝承する

講師：民族文化映像研究所所長 姫田忠義
日時：11月4日（水）



里地ネットワーク主催で民族文化映像研究所のセミナーに行ってきました。民族文化映像研究所とは、その名の通り、主に日本の民族（民俗）を映像で残していく仕事をしているところです。今回は、高知県椿山の焼畑とその村について、1970年代に4年ほどかけて撮影した映像を見て、この映画のディレクターでもある姫田さんに話を聞くというものでした。

この映像が、おもしろい。まず、焼畑の方法やそこで栽培される雑穀の播種、収穫方法、また、伝統的でいねいな豆腐の作り方、数世代に渡るヒエの備蓄や食べものに対する思い、地域習俗などがていねいに、そして撮影者の節度をもって描かれています。

傾斜30度のまさに急な斜面にへばりつくような30世帯の小さな集落。画面一杯の山が何度もあらわれます。

インタビューがあるわけでもありません。

様々な人の行為、自然の摂理を描き、時に語るだけの映像です。しかし、この映像は、集落とは何か、社会とは何か、農という営みとは何か、生活とは何か、現代の我々が何を見失っているのかを無言のうちに語りかけています。

その静かな迫力と、静かな空間に、とても惹かれました。

映画は体験ではなく、二次体験にしか過ぎません。しかし、「百聞は一見にしかず」です。たとえば、「脱穀」の一言ですまされる行為が、どんな工夫と歴史を持つ知恵なのか、「焼畑」という言葉でくられる一連の所作が、単なる農業形態を超えて、生産、消費、生活、存在にまでかかわることなのか、言葉で規定さ

れない映像の得点を十分に活かしています。

これがドキュメンタリー、記録映像というものなんだ、と知りました。

また、映画のあとに伺った姫野さんのお話は、文化論、言語論、宇宙論、民族学など幅広い論や学を超えて、人と人との関係や、社会、人のありよう、個人の、集落の存在について考え、行動するエネルギーを与えてくれるようなものでした。

不思議な、そして、楽しい、久しぶりに知的興奮のひとつきを過ごすことができました。

この民族文化映像研究会は、毎週金曜日、ATTIC FORUMを主催し、これまでに制作された様々な記録映画を上映しています。ぜひ、一度足を運んでみてください。（牧下圭貴）

ATTIC FORUM (アチックフォーラム)

とき 毎週金曜日 開場18:30 上映19:00

ところ 民族文化研究会内

(新宿区新宿2-1-4御苑ビル2階)

会費 700円

11月20日 鹿児島正月行事 (1982 / 33分)

鹿児島県肝属郡佐多町、高山町、大口市他。正月は、すべてのものが新しく生まれ変わるときとされる。各地の人々は様々な行事を行ない、作物の豊かさや子孫繁栄を願う。

11月27日 青海の竹のからかい (1990 / 41分)

新潟県西頸城郡青海町青海。青宇美町は、北陸道と日本海航路によって栄えた町。小正月15日、一年の豊漁豊作を願って、勇壮な竹のからかい（綱引き）が行なわれる。

12月4日 金沢の羽山ごもり (1983 / 36分)

福島県福島市金沢。旧暦11月12日から一週間、金沢の里山・ハヤマに男達が籠もり、厳しい戒律の神事を続け、ノリワラによる託宣へといたる。

12月11日 イヨマンテ～熊おくり (1977 / 103分)

北海道沙流郡平取町二風谷。2月、猟期のはじまり。イヨマンテは、熊の魂を神の国に送り返すアイヌ最大の儀礼である。アイヌの自然観、生命観が凝縮している。

環境保全型里地づくり 調査及びシンポジウム ～環境再生水俣・生活文化体験モニターツアー報告～

『里地通信9月号』にて紹介しました「環境再生水俣・生活文化体験モニターツアー」が晴天の中、10月2日（金）～4日（日）にかけて行われました。今回はその報告です。

水俣への移動途中、バスの中で「月の浦農産加工グループ」の方々が用意された地域の特産物をちりばめたお弁当を開いたときから、生活文化体験モニターツアーの期待は高まり、驚きと発見の連続がその先に待ち構えていたのです。3日間を通じて既存の水俣のイメージとは異なった、さまざまな水俣を体験し、遊び、十二分に楽しむことのできたツアーでした。

1日目 共通コース

水俣湾埋立地、水俣病資料館、語り部の話、ごみ分別収集

かつては企業城下町であり「水俣病」という公害病の代名詞ともなった水俣市。

水俣病がクローズアップされてから長い期間、「ミナマタ」という発音は不吉な、あるいは不幸な、近寄りたくないイメージで語られてきました。新しい世代が生まれ育っている現在でも、住んでいる町について水俣の子どもたちが自信を持って語ることができない時もあると聞きます。再生に向かって一步を踏み出した「みなまた」を語る言葉を見つけることが、誤ったイメージを修正する鍵になるはずで

ツアー初日は、過去の水俣病の記録を正確に後世に伝えるための資料館や、かつての「ミナマタ」を知る「語り部」の一人、杉本栄子さんを訪問することから始まりました。

資料館では、「水俣病とは何だったのか」という疑問に対して考えさせる展示がなされていました。過去の事例としてただ傍観するのではなく、個人として、住んでいる地域で何ができるのかを問いかけているようでした。

船と船とをしっかりと結びつけておくことを「もやい」といいます。

水俣病がきっかけになり、人と人とを結びつけていた絆（もやい）がゆるんで、外れてしまいました。そして、長い時間が経過して、今再び人との絆を結び始める「もやい直し」が始められています。杉本栄子さんは、水俣病とともに生きてきて、人の人との「もやい」の大切さ、人としての本当の「生きる力」とは何かを、水俣病からの自らの再生を通して語ってくれました。

語り部制度とは：「直接、患者の方から水俣病についての貴重な体験を話していただき、水俣病の苦しみに負けず、たくましく、生きることの尊さと水俣病に対する正しい認識を深めていただくために語り部制度がはじまりました」（平成6年10月）～『水俣病資料館パンフレット』より



最後に立ち寄った水俣市清掃センターでは、住民の手により資源ゴミなどが20区分に分別・収集されていました。環境問題への意識の高さから積極的な活動が展開され、分別収集を通じた地域コミュニティーも活発になることが期待されています。

20区分=活きびん、雑びん(透明びん、水色びん、茶色びん、緑色びん、黒色びん、板ガラス)、空き缶(スチール、アルミ)、ペットボトル、金属類(小さなもの、大きなもの)、紙類(新聞、ダンボール、その他)、布類、埋立ゴミ、有害ゴミ、粗大ゴミ、可燃ゴミ

2日目 コース別体験ツアー



アケビがとてもおいし。

晴天の中、各コースの参加者は日ごろの仕事のことも忘れて、のびのびと「遊び」を堪能しました。「まだ遊び足りない、もっともっと」というメッセージを参加者の多くが体で表現していました。

水俣は地域ごとにすばらしい素材があり、環境をキーワードにして積極的に行動できる地域でもあります。この結果は、3日目のシンポジウムにおいて各コースの参加者が「楽しかった」という言葉を数多く発言されたことからうかがうことができました。

A：水巡りコース

「水が作り出す風土と暮らし」(湯の児温泉から石飛)
コース概要：湯の児、仁王木の用水路、市渡瀬の丸石の井堰、薄原の水巡り、石飛湿地散策、釣り、紅茶作り、ダイゴロで遊ぶ

夜なべ談義：石飛村おこし会(於：石飛分校)

案内人：天野茂(無農薬茶生産者) 補佐：吉本哲郎

昼食：薄原農産加工場、夕食：天野さんの家庭料理

宿泊：天野宿(リサイクル手作り)もしくは、湯の鶴温泉

B：海巡りコース

「海のある暮らし」(湯の児温泉から湯の鶴温泉)
コース概要：湯の児(伝説、あわび養殖の話、ガラカブ釣り)、船にて移動、恋路島探訪、茂道、グリーンスポーツ散策

夜なべ談義：水俣の漁師の人々(於：湯の鶴温泉旅館)

案内人：杉本肇、補佐：小里アリサ

昼食：杉本家、夕食：湯の鶴温泉

宿泊：湯の鶴温泉

C：久木野コース



山の神様がじっとみつめていました。

「山の暮らし」(湯の児温泉から久木野へ)

コース概要：湯の児、寒川水源で水を飲む、棚田を見る、日当野を歩く、木を切る

案内人：沢畑亨、補佐：遠藤邦夫

夜なべ談義：地元の人たち、愛林館女性グループ

昼食：水源亭、夕食：愛林館

宿泊：愛林館もしくは湯の鶴温泉

D：湯の鶴コース

「湯治場を拓く」(湯の鶴温泉から湯の鶴温泉)

コース概要：七滝巡り、薬草摘み、稲刈り、湯の鶴散策

夜なべ談義：湯の鶴寄り会(於：温泉センター)

案内人：振興会、補佐：奥園惣幸

昼食：野外弁当、夕食：湯の鶴温泉

宿泊：湯の鶴温泉

3日目 里地づくりシンポジウム

「新しい旅の形、水俣の可能性」報告

各コースに参加された方々から、感想やツアーへの提案などの発表がありました。

実際に現地に行って体験するのが一番なのですが、なるべく生の声に近い内容で抜粋しました。この報告から何かヒントやイメージを汲み取っていただければと思います。

Aコース：石飛（時に関する12章）

- ・石飛に至る農村景観から気づいたことは、水路（石造り）が人の手によってできており、周辺には草木が植えられ、長い時間をかけて独特の景観ができたんだなということを知った。水俣は水がつくった田園風景なんだ。そこには、山の神、水の神が今も祭られ生活の中に息づいている。
- ・地元の食材を使用した農民の食事は、ここでしか味わえない素朴さがあった。
- ・山の上からの不知火海をはじめとした眺めがすごい。
- ・手製の木製車（だいごろう）に乗って遊ぶと、大人も我を忘れて無邪気になれる。
（あまりに夢中になりすぎてズボンに破いてしまった参加者もいました）
- ・お茶を手摘みし、茶もみをしながら発酵させ紅茶にして飲んだ経験は忘れられない。
- ・案内をしてくれた開拓農家の天野さんは、まったくの自然体。本人も楽しんでいる。自然体がツーリズムの原点か。

Aコース案内人の水俣市の吉本氏からは、「地域の当たり前のすごさにどう気づくのか」また「外に出たら水俣が良く見えてきた」ことについての話がありました。また、「都市に目をむけるより」「都市に背を向けるのもよいだろう」、その視点で「水俣に目をむけてもよいだろう」という示唆のある言葉をいただきました。

Bコース：海巡り（海のある暮らし）

- ・船にのって恋路島（無人島）上陸、海岸で貝をひろって海水で洗って食べたのがとてもおいしかった。海が本当にきれいで、海の幸がそのまま食べられる

のがうれしかった。海は水俣の再生に向けての希望、そして水俣は希望の象徴になれる。

- ・やどかりをゆでて食べた。おいしかった。これには土地の人もびっくりした。
- ・水俣の山がしっかりしていると海も良くなるんだなと思った。
- ・通常のツアーは盛り沢山になりやすいが、今回は非常にゆったりした時間が持てた。
- ・見残したところがいっぱいあって、また水俣に来たいと思った。
- ・釣針がなくなってしまった時に、地元の見知らぬ人が来て針をおいていってくれた。こんな自然な交流が持てて、水俣に対して非常に良い印象を持った。
- ・杉本さん一家が歩いてきた道は、水俣の歴史そのものと感じた。

Cコース：久木野（山・川・海のつながり）

- ・一日中、サルのように森の中にいた。
- ・植林地の除伐作業は、汗にまみれ、どろにまみれ、たのしく、非常に面白かった。
- ・本当の森の作業に従事したことで少しでも森のことがわかったような気がした。
- ・森の中でただ横たわってみることが本当に気持ち良かった。
- ・久しぶりに汗をかいて人間らしい生活をしたなと思った。
- ・「楽しく学べた」というのが一番の感想。
- ・炭火をおこして、炉端で各種の山川の幸を味わった。夜は愛林館で収穫したばかりの新米や近郊でとれた食材で調理された料理はとて美味しく十二分に堪能できた。
- ・山の神様の話、すぐ近くに「神さん」がいる、一緒に生活しているという感覚。
- ・生活そのものに生きる喜びをみだしている生産者とも語らうことができ、大変印象深かった。豆腐を製造しているおばちゃんから、地域のいろんな話が聞けた。
- ・生きるための技術を水俣の人はいっぱい持っている、うらやましいなと思った。
- ・水から体験したのももちろん、自然の中で生活をしている人の話を聞いたのがよかった。

Cコース案内人の沢畑氏（愛林館）からは、「森にまわる体験をいろいろしてほしかった」、つらい作業だけど「除伐はぜひいれておきたいプログラムだった」、「密度の濃い夜なべ談議ができて改善点も見えてきてよかった」というお話をいただきました。

Dコース：水巡り（湯治場湯の鶴）



- ・山の自然を満喫した一日だった。茶畑・製茶工場見学、七滝めぐり、棚田の稲刈り、温泉、夜なべ懇談会等々。
- ・山での収穫がいっぱい（のいちご、むかご、あけび、きくらげ、またたび、よもぎなど）で、あけびは動物との競争、収穫のタイミングがむずかしいことがわかった。
- ・七滝はどれもきれい、たくさんのわき水、湯の鶴の水源地の水がとてもおいしい。
- ・地元の人の方によるお昼ごはんがとても美味しかった。たきこみごはん、タカナの葉でつつんだおにぎりなど、地域の食材で賄われており、とても良かった。食器も、竹のコップ、竹の受け皿など身の回りにあるものでできて、香りもよく食欲を高めた。
- ・案内した方も一緒に楽しんでくれて良かった。
- ・この次に来たい、したいことがいっぱいできた。
- ・ツーリズムは、また来たいと思うかポイント。
- ・ナイフを持ったときに、子どものことを思い出した、遊ぶ素材はたっぷりあった。

Dコース案内人の湯の鶴の下田区長からは、グリーン

ツーリズムはお迎えするという従来のツーリズムとは違って、一緒に遊ぶことが大切のかなと気づいた事を話されました。「マスメディアのプロの方が参加されるので最初は大変心配した」が、「話をし、一緒に体験し、自分たちも楽しむうちに友だちと言う感じがして、「グリーンツーリズムは「遊び」を主体とするのが良さそう」ということが見えてきたとコメントされていました。

最後に、「次回みなさんが来る時には湯の鶴はかわったと言われるようにしたい」と心強いお話をいただきました。

熊本大学の佐藤先生からは、「グリーンツーリズムは既存の観光とは違い、地元の人と語るのがいい」、「地域をヒーリングの場としての活用」し、「むすぶ」というキーワードをいただきました。また、世界遺産に水俣を登録する運動を今日から起こしたらどうかという積極的な提案もされました。

その後、今後の水俣グリーンツーリズムに関する提案などの意見交換が行われ、次のツアーに活かされていくものと思います。

いくつかの意見を紹介します。

- ・修学旅行を誘致する場合、水俣を十分に楽しませてから水俣病などの環境問題に触れさせた方が意識が変革でき心に残りやすいのではないかと。
- ・今回のグリーンツーリズムの運営主体がやや見えにくかった。将来的に相談窓口や責任主体などをはっきりさせてはどうか。
- ・商業主義などに走りすぎてしまうとおかしくなってしまう。その点は、気をつけなくては。
- ・地域発展はこれまで量の問題だった、水俣は質の面で進んでいかななくてはならないのではないかと。

吉井水俣市長から、「水俣は“再生”に向けて第一歩を踏み出している」「もやいなおしを通じて市民の内面社会を再構成したい」「環境と公害を基礎とした、環境の学習基地となるようめざしたい」「水俣は強烈な個性を持っている、実は水俣病がおきたことが最高の個性である」その中から、グリーンツーリズムが生まれてくるのではないかとのお話がありました。

「町作りは人づくりから始まる」「過去・現在・将来を学べる場所でないとは本物ではないと思っている」と

いう市長の言葉に、このモニターツアーのまとめが込められていると思います。

最後になりましたが、モニターツアー3日間を通じて参加者に負けないくらい、事務局のスタッフも率先して遊んでしまいました。それほど、水俣には魅力がありました。

また、自然が豊かに残っているので季節に応じて遊びの内容も変わってきます。

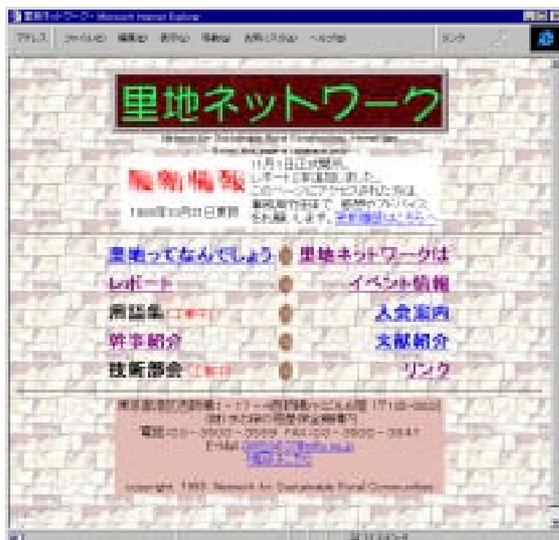
いつ行っても楽しめるのが水俣です。楽しみながら、また水俣に来たい、自然とそう思いました。肩肘張らないツーリズム、そんなツアーがあってもいいと思った3日間でした。(成田国寛)

おしらせ

ホームページのアドレスが変わりました

今後は、以下のアドレスにアクセスお願いいたします。ますます情報を充実させてまいります。皆さまのご感想をお寄せください。

<http://member.nifty.ne.jp/satochi/>



(なお、これに伴いまして、これまでの準備用サイトは終了させていただきます。ブックマークの変更などをよろしくお願い申し上げます)

ご希望の資料をお送りします。

里地セミナーやシンポジウム等の資料や記録をご希望の方は、以下のものを添えて事務局に申し出てください。できる限りの資料をまとめてご送付します。

資料請求に必要なもの

- ・角2封筒...お届け先住所、お名前を明記してください。切手を貼る必要はありません。
- ・メモ...希望する資料の内容(セミナー名、日時、講師名など)と連絡先(電話)、ご担当者名を記入してください。
- ・切手...手数料・郵送料として会員は1回500円、一般の方は1回1,000円を承ります。相当分の切手を同封ください。

忘年会のお知らせ

12月14日のセミナーに引き続き里地ネットワークの忘年会を行ないます。皆様、ぜひご参加くださいようよろしくお願いいたします。

日時：12月14日(月)午後5時～午後8時

場所：新橋駅より3分居酒屋「だるま」

会費：未定(3000円程度)

申込みは、11月中に事務局までお願いします。

寄稿：里山考 ～ 市民主導型の自然保護活動の支援を通じて～

里地ネットワークの本年度における調査事業及びシンポジウムは、日本財団の多大なる支援をいただきながら実施しています。日本財団では、里山保全活動の分野でも募集を行っておりますので、応募してみたいかがでしょうか。(12ページをご参照ください)

さて、その日本財団の高木純一さんから、日本財団の里山に関する考え方を「里山考」というテーマで寄稿していただきました。

高木純一さんとは、個人的にですが、里地ネットワークが設立される前、昨年のナホトカ号重油流出時に「救え日本海ボランティアネット」(現、JEDIC 日本環境災害情報センター)を、日本野鳥の会、WWF(世界自然保護基金日本委員会)、JEAN(クリーンアップ全国事務局)、OBIC(油汚染海鳥被害委員会)、ジャパンエコロジーセンター、環境パートナーシップオフィス、そして、日本財団とのパートナーシップにより、重油に関する環境保全活動を共に行ったことがきっかけでした。里地ネットワークにおいても、地域の環境災害は非常に重要なことであるため、引き続き個人的にですが、このネットワークに参画しています。友人の「里地考」を共に学びましょう。(事務局長：竹田純一)

「里山考」

市民主導型の自然保護活動の支援を通じて
日本財団 高木純一

写真

という言葉は、果たしてこの数年来、ずい分とあちらこちらで耳にする言葉「里山」とはちょっと違うようです。そこで、ここではこの辺りのことについてちょっと考察してみたいと思います。

1. 里山への回帰

ご存知のように、私ども日本財団は草の根の市民活動から国連レベルまで、非政府かつ非営利の公益活動を支援させていただいています。この一連の支援活動を行うためには、社会情勢の微妙な変化を逸早く感じ取り、いかにして社会ニードを先取りした事業を発掘していくかが問われます。昨今、最も目覚ましい活性化がみられるものの一つとして、自然保護分野の一形態である雑木林や小河川といった田園景観を保全・復元していこうという動きが急速に高まっています。私共の財団に対する支援要請も、草の根の市民活動から公益法人まで、この分野のご相談が年々倍増の勢いとなっています。そうしたなかで、日本財団が行う支援活動の重点項目の一つとしても「里地・里山の保全活動」があります。

里地ネットワークのみなさんが使われる「里地」

「里山」。何となくイメージは、みなさんわかるようですが、どうも言葉で言い表すのが難しいもののようです。この「里山」を始めて学術書に記したのは、1967年の京都大学の四手井綱英氏だそうです。また辞典の類だと「里山」が記載されたのはつい最近のことで、1995年に発刊された大辞林第二版が最初のようなようです。大辞林では、「集落の近くに有り、かつては薪炭用材や山菜などを採集していた人と関係の深い森林」とされています。この里山という言葉について、平成9年9・10月号「野鳥」で成城大学教授の松崎憲三氏が論じています。古来、日本民族は一方をヤマ、他方を田野に挟まれて清流のあるところ、カタヒラにサトを築き、水害の忌避と豊穡を祈る神を祭り、また自らも食すのに必要なミキとミケ、つまり

酒と米を作り生活していたのですが、このサトとは都に対する田舎、故郷、人家の集まっている所の意味があって、このサトが共有地として自給肥料や日常生活の糧などを得ていたヤマを、畏怖と信仰の対象であった深山幽谷のオクヤマと区別して、ウチヤマあるいはサトヤマとっていたのだそうです。一説によるとこの和語の「サトヤマ」は現在でも東北地方では方言として残っているそうです。

このサトとその周囲の生活空間であるサトヤマの姿が、日本人の生活に根差した原風景として遺伝子に深く刻まれ、現代語の「里山」という言葉になったとすると、かつて農耕生活を行っていた場所、つまり日本人の祖先が生活していた全ての空間がこの概念に含まれるわけです。丘陵地や平地、海岸段丘であっても里山ですし、薪炭林や生産林から生活用水を得ていた河川や湖沼、田畑はもとより、そこに住む農家の敷地や建物までもがこの概念に含まれると考えられるのではないのでしょうか。(財)日本自然保護協会の「里やま」の定義によると「林だけでなく、水田や畑、小川や湿地、ため池、草はらなどさまざまな環境が一体となって、たくさんの種類の生き物が暮らすことができます。そこでこのような農村の自然を形づくっているさまざまな林だけでなく、水田や畑、小川や湿地、ため池、草はらなどを含めて「里やま」と呼ぶ。」とされています。さらには横浜方面などで盛んな都市公園緑地や小河川を市民が管理していく形態の活動や、本来の意味での「ミティゲーション」や「ピオトープ」の概念も、その動機と目的は同様などところにあるわけで、その意味では「里山」の範疇にあると捉えるべきでしょう。昨今では環境基本計画にいう行政用語の「里地」という狭い概念よりも、むしろこういった広義の捉え方の方が、より一般的になっているようです。日本財団ではこうした広義の概念を人間中心の「アメニティ」でもなく、自然生態系の観点から「生き物緑地」と呼ぶことにしています。こう考えていくと森林生態学、水圏生態学から農村社会学、河川工学、造園学などまでを縦断した「里山学」ともいべき学問体系を早急に確立させるべき必要性を感じる昨今です。

「兎追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川」日本人なら誰しもが口ずさんだ童謡の情景です。昔々、おじいさんが芝を刈りに行ったのは雑木林で、おばあさんが洗濯にいったのは用水路、これこそがまさに日本人ならで

はの心象風景なのでしょう。しかし藁葺き屋根の家などを見かけなくなってから久しいものがあります。こうした日本の原風景は、あの列島改造論以降、この30年の間に急速に消えて行きました。さらに追い討ちをかけたのは昭和62年の総合保養地域整備法(リゾート法)の制定によるところが大きいでしょう。これにより一時はリゾート計画面積の総計が、日本の国土の約20%にも達するという異常事態にさえ陥りました。リゾートといっても、大半はゴルフ場のことです。そんなにも日本のゴルフ人口は多いのだろうか?農地では既に使用禁止の農薬を、ゴルフ場では浴びるほど使っているけれど、飲料水などは安全なのだろうか?自分達の慣れ親しんだ景観を次世代に残さなくてもいいのだろうか?人々は誰しもがそういった疑問に行き当たることになり、全国的に開発反対運動が展開されると共に、里山保護の市民活動が爆発的に活性化したのです。それはイデオロギーなどではなく、まさに日本人の本能が突き動かしたといえるでしょう。

こういった社会情勢の変化は、ただ漫然とそこに住んでいた住民が、自ら考えて住まう市民へと意識改革が進んだことを良く表わしている事象だとも言えます。「市民社会の到来」などと表現する向きもあるようですが、あの阪神・淡路大震災やナホトカ号重油災害の例を引くまでもなく、何かが起きるとボランティアとして駆けつける風潮がすっかり定着したのも、その表われでしょう。自らが考えながら住まっていると、幼い頃に慣れ親しんだ風景がすでに身の回りから消えかかっていることに気が付きます。そうして日本人としての原風景である「里山」への回帰本能が呼び覚まされることになるのでしょう。これが近年「里山」という言葉が良く使われるようになった理由であらうと思われま

2. 実体験の機会を奪われた子どもたち

では生まれながらにして、そんな原風景には触れ合ったことがないか、あったとしてもせいぜい年に1~3日のキャンプ程度しか知らない、子どもたちの世代はどうでしょうか。里山景観は単に人々の郷愁を誘うに留まらず、人間と共生して初めて生息しうる動植物

種の多様性保全の場ともなっています。これらの人間以外の生物を軽視することは、人類を含む生態系全体を攪乱することにもなり、人類生存の生物的基盤すら脅かされることにもなりかねません。またこれらに起因する生命の軽視の傾向はヒューマニズム崩壊の危険性も内包しているのです。平成8年度には政府も環境白書においてこの点に言及し、近年のこどもの生育環境と「遊び」の変化が、その後の人格形成において大変深刻な影響を与えていることを指摘し警鐘を発しています。神戸の少年少女連続殺傷事件や福島教師刺殺事件、四街道のダンベル撲殺事件など、昨今の若年世代による凶悪事件が枚挙のいとまがないほどに相次いでいるのは、正にその警鐘が具現化したものに他ならないといえるのではないのでしょうか。幼い頃に花摘みや昆虫採集をすることは、時に残酷なまでの生き物の死に直面することにもなります。生き物の死を実体験することで、こども達は生命の尊さを知ることになり、健全で豊かな感受性を育むのです。このようにこども達の情操発育と里山景観は密接な関係があると考えられます。受験戦争の加熱や、テレビゲームの急速な普及、遊び場空間の激減は仮想疑似体験（バーチャルリアリティー）の世界にこども達を閉じこめて、実体験をする機会を奪ってしまいました。

自然とのふれあいという実体験の最も重要な点は、一方的に与えられる知識ではなく、自らが考える知恵を習得できることにあります。現在の我が国では、こども達はもとより、大人でさえも自然の中で自己を鍛錬する機会が失われてしまいました。昨今のアウトドアブームとは、単に自宅を自然の中に持ち込んだようなものですから、自然とのふれあいというには余り程遠いものといえるでしょう。

3. 仮想現実の中の里山

こうした実体験に乏しい世代は、里山などの自然や生命の尊厳すらも、仮想現実の中で体験することになります。偶然にもこうした傾向を巧みに利用した事例を挙げてみます。埼玉県の西部と東京都にまたがる狭山丘陵の自然を残そうと、自然保護団体が中心となり「トトロのふるさと基金」を設置して、ナショナル・トラスト運動に取り組んできたあの活動です。昨年、アニメーションとしてはあのディズニーをも凌ぐ映画

史上に残る空前の大ヒットとなった「もののけ姫」を製作した、日本を代表するアニメーター、宮崎駿氏の代表作「となりのトトロ」を、イメージキャラクターとして前面に押し出して、狭山丘陵の里山を守ろうというものです。昨年、この団体の事務局長を勤められている永石文明氏にお伺いしたところ、こうしたイメージ戦略が呼び水となったのか、若年層世代からの反響が大きく、高校生以下のこども達が自分で手紙を書き、無け無しのおこずかいまで同封してくることが大変多いといわれました。それは確かに金額ではわずかなものになってしまっていますが、件数で考えると寄付者の実に4割にも達しているそうです。市民活動が活性化するための大きな要因は、何もその団体のファンレイジング能力だけではありません。その団体の活動を多くの人に理解と賛同をしてもらうことで、いかにして社会的な認知を得られるかということも大きな要因といえるでしょう。この小さな市民運動から始まった団体は、アニメーションの中のイメージキャラクターを使うことで、それを見事に成功させて、今春には財団法人化することまでできたのです。これらは何か活動を象徴するものがあれば、若年層世代はそれを元に仮想現実を作りあげて、その活動に賛同しやすくなるという傾向があることを示しているのではないのでしょうか。

4. 岐路に立つ里山保全活動

黎明期から約10年を経て、里山を保全しようという活動は自分たちがこどもの頃に慣れ親しんだ原風景を、次世代に残してあげたいという世代の活動から、今どきのバーチャル世代へとバトンタッチするには、どのようにしたらよいのか、また時代とともに広がった活動メニューに対して、余り増えることの無い活動のコアメンバーをいかに確保するのかということを考える岐路にあるようです。このことについて、小中高校の先生たちが自然についての学習を学校や地域の中で行うことを民間団体の立場から支援し、また非営利組織の指導者養成活動も行っている「環境教育学習センター」の事務局長を勤められている森良氏がかつて語ったことがあります。「いろいろな地域で人づくり、組織づくりができれば、僕は消えようと思う。その時、その時に必要な仕事をして、終われば消えて行く。そ

れが NPO だと考えている。」つまり市民団体の活動は、団体存続のための活動ではなく、時代の要請がありての活動だから、一つの社会的使命を終えた段階でその団体は解散する、または活動のリーダーは引退すべきというのです。「老兵は去れ。」これも市民団体の将来はいかにあるべきか、また既存の公益法人の現状と市民団体のあり方の相違を考えたとき、一つの回答になるのこともなかも知れません。

5. 市民による里山保全活動の将来

バブル景気が終わり、いつまで続くのか全く先の見えない不況に喘ぐ現在の日本では、リゾート法による開発計画も財政困難のために一時棚上げとなっています。従って市民による里山保全活動も保護反対運動の影を潜めて、本来あるべき花鳥風月を愛で、山野河海を愛護する活動に戻れるのではないかとされるかも知れません。それならば先の森氏のご意見のように一つの社会的使命が終わったとして、解散したり組織改変する団体が多くなっているのでしょうか。現状では決してそんなことはなく、里山などの自然保護を行う市民団体はかえって反対運動に向かわざるをえないことになっているようです。日本では景気対策といえど大型公共工事の乱発であり、それが良好な日本の原風景を改変することになるからです。昨年の諫早湾の干潟埋立てや、海上の森の愛知万博、藤前干潟の廃棄物処理場など、むしろ自然改変を伴う開発行為は大型化してきています。こうした中で市民団体は余計に神経を尖らせ、市民によるチェックシステムを働かせざるを得なくなっているのです。

一方で、昨今では国の考え方もかなり変わってきています。かつて大規模開発といえど、建設省が推進するものというイメージがありました。その建設省が、大きな方向転換を行ったのです。そのことに関して水

辺環境の保護活動を行っている市民団体「みずとみどり研究会」の金子博さんが話されたことがあります。

「平成7年3月、河川審議会は河川環境対策の在り方について答申した。その柱は 地域の健全な水環境を回復する 生物を保全する 地域とのよりよい関係を再構築する、である。建設省の河川行政が「治水と環境」の方向性をはっきり打ち出し、流域の声に耳を傾けて川づくりをすると宣言したのだ。NGOと行政がどうかわり合って環境保全の実をあげるか、新しいシステムづくりの実験だと思う。」単に市民と行政のパートナーシップ論だと片づけてしまえば、もはや言い古されたものになってしまいます。しかし今までと大きく違うのは、少なくとも河川行政においては、行政が市民活動を統轄しようという従来の考え方を転換し、自ら行政行為に限界があることを認めて、行政の方から市民に歩み寄り、意見を取り入れることによって、市民という外部者による行政のチェックを受け入れようようとしていることでしょうか。実際この方針に従い地域住民の意見により見直された公共事業は、昨年の北海道での「時のアセス」で千歳川放水路の予算未請求、徳島県の細川内ダムを始めとするダム工事での383件中で6件が中止、12件が休止、70件が凍結、熊本県の羊角湾での干拓計画自体が中止されたことなどのように相次いでいます。

このような行政の政策転換の動向がどこまで広がっていくかは未知数です。しかし行政がそこへ踏み出すことによって、市民団体の新たな役割が生まれるとともに、より良い社会が実現できるのではないのでしょうか。真の市民社会とは、市民が誰かの呼び掛けに応じ参加することではありません。私たちの未来は、誰にたよることなく私たち自身による市民活動が自主的かつ主導的に、率先して切り拓いていかなければなりません。日本財団もそうした活動を支援していきたいと思えます。

(助成金申請については、次のページをご覧ください)

イベント・募集案内

日本財団 助成事業募集

助成事業名：「ボランティア活動支援」事業
申請期間：11月7日から12月20日（当日消印有効）
合否判定：平成11年4月1日付文書をもって通知。
対象事業：
平成11年4月1日から平成12年3月31日迄に複数のメンバーにて構成される市民団体が実施する事業。また原則的に学術的な調査や研究を行なうための事業は対象外。（公益法人向けの募集は既に締め切りました）
助成（援助）額：上限額は100万円。決定後のお支払いは原則的に一括前払い。
対象外経費：
常勤スタッフ給与や事務所の賃貸料・水道光熱費などの団体の維持管理にかかる経費、他団体の実施する催しへの参加費用、他の助成機関などからの助成事業の不足分の経費およびパソコンや普通自動車などの汎用機器類の購入資金などは原則的に対象外。
今回の重点項目：自然環境分野では「里山」。

詳しくは要綱と申請書をご請求ください。要綱と申請書のご請求は「団体名」「ご連絡先住所」「ご連絡先電話・FAX番号」「ご担当者氏名」を明記の上、必ずFAXにてご請求ください。

（大変申し訳ございませんが、問い合わせが殺到しますので、お電話での対応はできかねます）

また、下記の日本財団ホームページまたは、11月7日の新聞朝刊などでも掲載致しますので、それらもご覧ください。

日本財団 ボランティア支援部 協力援助課

105 東京都港区虎ノ門 1-15-16

Fax：03-3580-6215

URL <http://www.nippon-foundation.or.jp/>
海外に所在する団体が実施する事業については、別途、国際部までお問い合わせ下さい。

日本財団 国際部 Tel：03-3502-2307

かんぼ健康づくり講演会 「私達、家族の歩み」

熊本県水俣市在住、水俣病患者として現在自らの体験を「語り部」として水俣病資料館で語りつづけている杉本夫妻の講演会が、三重県内で開催されます。
日時：12月5日（土）14：00～
場所：三重県河芸町町民会館
参加費：無料（ただし、入場整理券が必要）
申込み、お問い合わせは、
電話：059-245-8888
（河芸町社会福祉協議会 西田）まで。

里地づくりシンポジウム

里地通信でその経緯を逐一報告していた愛知県美浜町の「LET'S地元学」。今回、活動報告の場とし、里地づくりシンポジウムを開催します。

地元学を実践し活性化の手法を学びたいとお考えの方、ぜひご参加ください。

開催概要は以下の通りです。

事務局への連絡用紙でお申し込みください。宿泊等の調整をさせていただきます。

シンポジウムの目的：

美浜町で生活する地域リーダーを育成し地域の活動を活性化するために、リーダーに対して「地元学」の指導を行い、講師とともに現場に出て地元学を実践し、みずから習得し理解した上で、リーダーが核となり、地域の人々と共に地元の資源を発見し、地域資源マップの作成を行う。また、発見した地元資源をシンポジウムで発表することにより、より多くの方が地域資源を発見する機会を提供する。

テーマ：布土発見！水のゆくえとあるもの探しをしよう - 布土における地元学の実践 -

日時：98年12月6日（日）10時～19時30分

会場：愛知県美浜町 布土公民館
（河和口駅より徒歩20分）

日程：

10:00～12:00

フィールドツアー（地域資源観察）
クラフトコーナー（竹細工、ドライフラワー）
即売コーナー

12:00～13:30 昼食時間（雑炊を無料配布）

13:00～16:30 シンポジウム（活動発表を中心）

17:00～19:30 交流会（参加費1500円前後）

シンポジウムでの報告内容

（地元生活者の方々からの実践報告です）

・地域づくりの経過報告・水のゆくえマップ・里山と植物・川鵜について・きのこ狩りをして・ドライフラワー・山芋掘り・竹炭作りをして・EMボカシとキッチンママの活動・定年帰農者と農地について・布土のまつりと文化について

IUCN 50周年記念 国際シンポジウム

IUCN（国際自然保護連合）は設立50年を迎え、世界各地で自然保護のさまざまなイベントが開催されています。日本では「世界遺産と日本」をテーマに記念シンポジウムが開催されます。これは日本の原風景ともいえる二次的自然を様々な角度から専門家の方々にお話していただくとともに、日本の典型的な里山を写真で、日本の世界遺産をビデオでビジュアルに、さらに薩摩琵琶と石笛という日本独特の音で表現します。

日時：11月29日（日）13:00～17:00

場所：京都国際会議場

参加費：無料（ただし先着順で120名）

申込み、問合せ先：

電話03-3265-0521

（財）日本自然保護協会内

IUCN日本委員会

推薦図書

『野にありて目耳をすます 姫田忠義対談集』民族文化研究所編（はる書房）

民族映像文化研究所が行っている各地の映像記録の撮影の背景など対談形式で記されています。セミナー報告をもっと知りたい方は、ぜひとも読んでください。

『里地からの変革』環境庁企画調整局里地研究会編（時事通信社）2500円

里地ネットワーク設立前までの研究活動を記録したものです。さまざまな地域の紹介があります。

『定年帰農』現代農業1998年2月増刊（農文協）900円

退職後に農的な暮らしを行う人が増えています。インタビュー形式でさまざまな人生が紹介されています。里地ネットワークでも、定年帰農の趣旨の事業を検討しています、詳細は次号で。

『エコダイアリー 歳時記1999』美麻エコビレッジ・プロジェクト 1000円

会員でもある美麻遊学社の環境ガイダンス付き手帳です。歳時記の名の通り季節の文化手帳であり、情報電話帳です。お手元に1冊どうぞですか。

16ページへ続く

里地セミナーご案内と募集

「環境土木技術について」

日時：11月27日（金）午後2時～午後5時

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：西日本科学研究所代表取締役 福留脩文

地球上に生命が誕生してから何十億年もの間、その土地固有の気候、土壌、水域の多様な生物群が独自の生態系をもつ環境を形成してきた。産業革命以降、人々が農地開発や都市開発のための土地利用を進めたため、かつての自然景観は大きく改変され、自然界の大気、水、土壌の汚染が広がり、多くの野生生物が絶滅、減少してしまった。

これまで私たちが思い描いてきた「土木」とは、人間社会を自然の猛威から守るために、壊れない、崩れないを前提にしてものでなかったか。コンクリートで固められた川や道路など。残念ながらコンクリートの川や、道路では食物連鎖に見る生態ピラミッドの底辺に位置する植物や小動物にとっては生態が難しく、これが破壊されると、その上位の生物たちも生存が危うくなる。

1970年代後半、自然界の多様な生物の生息を可能とする新しい思想と技術の実践例として、スイスで「近自然河川工法」が開始された。河川では、これまで平坦に固められてきた河床や水際に、藻類や水生昆虫などの生息できる玉石や砂利、泥が移動し堆積する環境を作る。また、都市部においてはコンクリート、アスファルトで固められた駐車場、公園、道路などできるだけ自然に近い素材を用いて、大気・水・土壌の物質収支の関係を正し、自然界の生き物にもその健全な生息環境を提供する。

新しい目的の「環境土木技術」は、近自然河川工法の思想と技術を道路や都市の基盤作用にも応用したもので、失われた生態系の復元を目指し、生態ピラミッドのバランスを回復するために、そのベースを構成する生産者としての植物、第一次消費者の昆虫類などの

生息空間を確保して、こうした地球規模での環境問題に対して、生態学的な解決策を目指す景観生態学の視点からアプローチする土木の技術である。

「里地づくりの試みから

21世紀の持続可能社会が...」

日時：12月14日（月）午後2時～午後5時

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：京都大学 内藤正明教授

（里地ネットワーク代表幹事）

里地ネットワークづくりの話が始まってからまだ数年しか経たない短い間にも、里地・里山に対する世の中の関心は急速に高まっている。その背景は、我が国が戦後50年、猛烈なスピードでやってきた「都市化・工業化・経済効率の追求」といった社会の発展方向が、あらゆる側面で行き詰まりを見せたことへの反省の高まりにあるだろう。

とはいえまだ現実には、特にわが国の場合、社会の仕組みを大きく変えていわゆる環境共生社会へと転換していくことに強い抵抗がある。その理由は、これまでの成功体験とそれに依拠する戦後体制の強固さにあるだろう。そのような状況下でいま選ぶべき戦略は、国レベルでは基本的には現在のシステムを維持しつつ、技術のブレークスルーによって問題の克服を図ることしかないであろう。一方、これまでの発展から取り残され、多くは崩壊の危機にすらある里地・里山では、それとは本質的に異なる新たな発展の道を、それぞれの自然特性と社会のニーズによって多様に追求することである。

2つとも会場はリクルート銀座8ビル 会議室

（JR新橋駅銀座口より徒歩2分 高速道路の高架をくぐって正面のビル 室名は受付に表示されます）

セミナーのお申込みは、巻末の申込用紙をご利用いただき、FAXにてお願いします。

事務局日記 98年10月

10月2日～4日

熊本県水俣市

エコ水俣フィールドツアー実施報告参照。

10月12日(火)

第3回幹事会

今回の幹事会では、調査事業の進捗状況とシンポジウムの準備状況、今後の里地セミナーに関するテーマと講師についての検討を行ないました。

10月14日(水)

北海道標茶町

標茶町では地域振興会を中核に地域づくりが進められています。前回は、虹別地区を中心に、訪問しましたが、今回は、塘路地区、阿歴内地区を中心に現地視察しました。地区の声が集約され、これから、課題の整理、問題の把握、具体的な行動指針、行動計画ができていけば素晴らしい地域になるのではないかと思います。標茶町からの要望を待ち、里地ネットワークとしての活動計画の検討を行なう予定です。

10月22日(木)

熊本県水俣市

エコ水俣フィールドツアーと里地づくりシンポジウムの反省会と今後の展開策を練る検討会を行ないました。水俣に起きた水俣病の経験を乗り越えた水俣の生活者が、「水」「ごみの32種分別」「生ゴミの堆肥化計画」「ISO14001」「グリーンツーリズム」という点で、もっとも先駆的な地域づくりを行っていること、私たち日本人が今、学ばなければならない生活様式、ライフスタイルのあり方の根本的な解決の方向性が水俣にあるように思います。このことを伝えるための修学旅行を初めとするツーリズムのあり方、実践計画に関する検討を行ないました。水俣では、年度内にもう一度モニターツアーを実施し実施計画書を作成できるように検討しています。

10月26日(月)

愛知県美浜町訪問

美浜町で実践中の地域資源調査、「水のゆくえ」「あるものさがし」の中間検討会を行ないました。そこに住む生活者が、地域にあるものを調べ、活用し、生活の中に取り入れていく、身近な自然のなかにあるものを、食べたり、楽器にしたり、生活用品として活用していけたら、地域の中での生活を楽しみ、地域の自然環境を守り活用することができると思います。美浜町布土地区では、参加する人々も徐々に増え、一人一人が楽しんで、地域の自然と親しみ活用策を考え始めています。この輪をもっと多くの人々と共有するためのシンポジウム(12月6日)を開催し、このシンポジウムをきっかけとすることで、美浜町全体への自然と共生した地域づくりが動きだす。そんな気配がしてきました。

10月28日(水)

山形県長井市訪問

家庭の生ゴミを堆肥化し市民に提供するレインボープランを長井市では進めています。このシステムの現状を市役所生活環境課の齋藤さんにお聞きし生活者へのインタビューを行なってきました。肝心なのは、家庭で水切りをしっかりと行なうこと、そして、生ゴミを一時保管しておく家庭内のバケツに、水を除去する機能をいかに持たせるかということです。生活資源を活用した生ゴミ堆肥化により有機農業が一步進むことを願っています。

10月29日(木)

山形県朝日町訪問

朝日町は、5月のセミナーでも紹介させて頂いた「エコミュージアム」を町の総合計画に取り入れている自治体です。そんなエコミュージアムを研究して独自の方法で町に取り入れてた朝日町、生活地理研究所の菅井さんと、自らトチの木を植樹し、蜜蜂の森作りを行っている、養蜂家であり蜜蝋燭職人のピースファー

ム・安藤さんを訪ねました。雪国や静かな夜には「蜜蜂の巣でできた蝋燭」をともした、演出はいかがですか。

10月29日(木)~30日(金)

山形県最上町訪問

第2回グリーンツーリズム講演会に講師として招かれました。これからの最上町を考えていこうとしていたところでしたので、講演会前に地域内を少し見てから、里地ネットワークの概要を説明し、水俣の地元学の実践例を示したのち、和気あいあいと楽しい提案をしていきました。冬に向けて楽しいイベントが開始され、そこから、さまざまな交流が生まれ、活性化が図られていきそうな予感がしました。まずは、楽しいことから、そして、外との交流が、最上町の原点のような気がしました。外との交流の拠点はどこの誰、外と内をつなぐ人は誰と誰、外の人材リスト集めなど、すこしずつ見えてきそうでした。

10月30日(金)~31日(土)

秋田県二ツ井町訪問

「森で遊び林業を考える学校」が開催されはじめてから3年。いよいよ、本格的に、林業の町の林業振興プログラムが動き始めそうです。来年2月26日~27日に、

「森の学校」冬の教室が開催されます。里地ネットワークでは、これに合わせたシンポジウムの開催と地元の民家のあるもの探しを、地域の人々とともに行ない、二ツ井の町として大切にしなければならない、木と人と森の関係を考えていきたいと思います。

10月31日(土)

121回 秋田県種苗交換会

種苗交換会があるということで、在来種の種の交換会かと思い訪問しました。が、残念ながら、農産物の品評会でした。地域の産品開発を考えると、その土地に最も適した「在来種」を栽培し、地域固有の文化や産品を開発すべきであると考えています。

10月31日(土)

山形県金山町訪問

「谷口がっこそば」金山町の谷口地区には、一昨年閉鎖された分校跡に、地区の農業者7世帯による「そばや」と交流拠点が誕生しました。生産者が行う「そばや」兼「宿泊交流拠点」は、地域文化をそのまま体験できる場です。ぜひ一度食べに行ってください。里地ネットワークでは、ここで、生活文化、産品開発、地域づくり、交流をテーマとする研修会を行ないたいと強く感じました。

推薦図書

『土の子育て』青ぞら保育・なかよし会編(コモンズ)

7歳までは神の子、子どもは地域が暖かくみまもり育てたもの、土と触れ合い自然の中の子育ての実践です。人と人、人と自然は、この体験をもとに築きあげられるのではないのでしょうか(我子の子育て記録です。竹田)

『こころの育ちを願う総合学習』横浜国立大学教育人間科学部附属 鎌倉小学校著(明治図書)2200円
教育とは何か、次の世代を担う子どもたち、心を育みを基層においた総合教育の実践記録です。(我子の子育て記録です。竹田)

『木材百科』秋田県立農業短期大学 木材高度加工研究所編((財)秋田県木材加工推進機構)2500円
里地ネットワークでは、秋田県二ツ井町を中心に、米代川流域での林業の活性化を検討しています。その秋田県は、杉の産地でさまざまな高度処理の研究がなされています。そのコンサイスです。